
琉球諸島における雨乞いと動物
—— 供犠的要素がみられない理由について ——

*Rain ritual and animals in the Ryukyu Islands :
About the Reason why there are not
seen any animal offering elements*

宮平 盛晃
Moriaki Miyahira

Abstract:

The Ryukyu Islands are host to a variety of rain-making rituals, such as singing, dancing, bonfires, water fighting, tug-of-warring, etc. On the other hand, the rain-making rituals in the mainland Japan also include throwing the head of cattle or a horse in a pond or swamp to the god of water. This research shows a lack of any animal sacrifices as well as that animals had no part in the rain-making rituals of the Ryukyu Islands.

This paper questions why there weren't any animal sacrifices and why the Ryukyu Islanders didn't use animals in their rain-making rituals. Okinawan families have commonly raised livestock such as swine and goats, which were slaughtered, sacrificed and eaten by the family or by village communities at various annual events or rites of passage. Meat is not a symbol of uncleanness as in mainland Japan, but rather it is a very important delicacy in the Ryukyu Islands. In addition, in mainland Japan, people throw a part of livestock away into ponds or swamps where the dragon god lives as a way of relinquishing uncleanness. This was believed to cause the god's fury and make rain. On the other hand, in the Ryukyu Islands, people used meat in sun-making rituals to calm down the dragon god's activities and to stop continuous rain. They never used meat to make rain. Judging from these points, it could be concluded that the different perspective on animal meat represent the different Ryukyu island's Rain-making rituals and those of mainland Japan.

キーワード: 雨乞い、水田稲作、肉、動物供犠、ハレとケガレ

はじめに

琉球諸島では、早魃時に行われる雨乞い儀礼として、①歌や踊りで水神に憐れみを乞う、②山上で火を焚く、③聖水をもらってくる、④体に鍋墨をぬり、水をかけ合う、⑤綱引きなど、地域によって様々な方法が行われた〔沖縄大百科事典刊行事務局編 1983: 上巻 76-77〕。いっぽう、日本本土では、それらのほか、水神の池や淵に牛馬の首を投げ込むといった行為がみられたという〔原田 2012:184-186〕。

琉球諸島の雨乞いに関する研究は、主に王府レベルの雨乞いや、儀礼内の歌謡に焦点が当てられてきた〔崎原 1971〕〔山里 2010,2015a,2015b〕。また、その対象地は宮古や八重山などの先島諸島が主で、沖縄諸島を含めた琉球諸島全体の調査分析は行われてこなかった。そして、日本本土の雨乞いは動物供犠と捉えられるが、琉球諸島における雨乞いの供犠性に関する研究はみられない。

本論は、琉球諸島全域の雨乞いを対象に、主に儀礼と動物及び供犠的要素の関連性を中心に、日本本土の儀礼との差異を明らかにし、その意味を考察するものである。

このことは、琉球諸島における雨乞いの研究が限られている点からも有意義であるとともに、その分析結果は、琉球諸島の雨乞いのみならず、動物供犠の実態解明のための重要な手がかりとなり、また、肉に対する意識や神観念の多様性や地域性をも明らかにすると考えられる。

本論では、定期的あるいは臨時に行われる、雨乞いや雨願アミクイと呼ばれるような、降雨を主眼とする儀礼を対象とする。農耕儀礼などの年中行事、または綱引きといった祭りの中には、降雨が目的の一つとして挙げられる場合があるが、それらすべてを雨乞いとして一様に扱うことはできないと考えられることから、本論の分析対象には含めていない。

各地域の特徴の有無を確かめるため、琉球諸島を沖縄本島北部、中部、南部、その周辺離島、宮古諸島、八重山諸島の6地域に分けて分析を進める。また、筆者の聞き取り調査によるデータには〔聞〕と付し、本稿の末尾に、調査年、話者の頭文字、年齢、性別などを記した。

本稿で扱う雨乞いの多くが文献資料から確認できた事例であるが、これはフィールドワークの難しさを示している。雨乞いのほとんどは第二次大戦以降、約70年以上は行われておらず、儀礼を体験あるいは見聞した話者が限られているため、雨乞いに関する話がなかなか確認できない。また、早魃という非常時に臨時に実施されるため、長期間行われない事例が多く、もし実施されたとしても内々で執り行われるため、儀礼観察も非常に困難である。これらフィールドワークの難しさが、当域の雨乞い儀礼の研究が進んでいない原因の一つと考えられる。

1. 雨乞いと動物

(1) 雨乞いの分布形態

筆者の行ったこれまでの調査で、29例（文献20・聞き取り9）の雨乞い儀礼が確認できた*¹。分布形態を整理する前に注意したいのが、今回扱う事例に限られた調査*²の中で確認し得たものであるという点である。管見の資料や調査が不十分というだけで、儀礼が琉球諸島に均等に分布していたという可能性も踏まえ、分析を進めたい。

29例の雨乞いを地域別に分けると、沖縄本島北部1、中部3、南部1、周辺離島4、宮古7、八重

山13となる*³。八重山諸島が最多で全体の4割半ばを占め、次に多いのが宮古(7例)であった。琉球諸島を沖縄諸島(9例)と先島諸島(20例)に分けると、先島諸島における事例が2倍以上多い。沖縄諸島の4地域を事例数の多い順に並べると、周辺離島(4例)、中部(3例)、北部・南部(1例)となり、事例の分布は本島より周辺離島に顕著であった。

事例数の地域差の意味を、琉球諸島各地の村落の総数とあわせて考えたい。まず、戦前または現時点での沖縄の村落の全体数を正確に把握することは困難である。そこでおおよその基準になるのが、近世来の村落名を踏襲している場合が少なくない現在の大字である。1つの字の中に複数の村落が含まれる場合もあり、村落数の実態はより多いと思われるが、地域ごとの村落数の差を知る上では十分な目安になろう。

『沖縄県市町村別大字・小字名集』を集計した結果、711の大字を確認できた〔沖縄県土地調査事務局編1976〕。各地域を数の多い順に並べると、沖縄本島中部213(30%)、南部210(30%)、北部157(22%)、周辺離島55(8%)、宮古43(6%)、八重山33(5%)となる。括弧内は全体に占める割合であるが、琉球諸島の村落のほとんどは沖縄本島(82%・580字)に集中していることが分かる。そして、沖縄諸島では周辺離島、先島諸島では八重山が最少の地域である。

雨乞いの事例数を多い順に並べると、八重山13、宮古7、周辺離島4、沖縄本島中部3、南部1、北部1となるが、大字数の順番とほぼ反対となっている。琉球諸島で大字の数が最も少ない八重山が雨乞いの数は最多で、沖縄諸島で大字が最少の周辺離島も雨乞いの数は沖縄諸島で最多となっている。雨乞いの村落数が当域の大字全体を占める割合は、沖縄本島の各地では1%未満～1%半ばであるのに対し、周辺離島7%、宮古16%、八重山では39%を占めている。八重山の割合は他地域に比べ格段に高い*⁴。

琉球諸島における村落数を踏まえると、周辺離島と八重山は単に雨乞い儀礼の事例数が多いだけでなく、集中度も非常に高いことが明らかになった。

(2) 動物を使う事例

儀礼に動物を使った例は29例中5例みられる(沖縄本島中部1、周辺離島4)。沖縄本島中部の北谷町平安山〔北谷町教育委員会1995:54〕、周辺離島の伊平屋村田名〔聞〕、島尻〔聞〕、伊是名村諸見〔聞〕、久米島町山城〔聞〕の事例である。周辺離島に集中し、当域では確認できた全例に動物の使用が認められた。

しかし、全体的にみると動物の使用例は2割弱(17%)と、非常に少ない。事例数が最多の八重山に皆無である点も興味深い。

要された動物の種類は、豚3例、山羊1例、その両方が1例であった。数が限られているため特徴として捉えるのは早計だが、豚は中部と周辺離島に、山羊は周辺離島のみを確認でき、牛、馬、鶏などの他の動物は未確認である。

動物は、供物として用いられったり、村人によって食されたりした。具体的には、供物(平安山)、共食(田名、島尻)、両方(山城)の3つに分けられる。残り1例は、動物を要したが、その使用方法が確認できなかった(諸見)。

動物を使った事例群から、沖縄諸島の周辺離島である伊平屋村島尻の事例を挙げたい(筆者下線)。

事例) 伊平屋村島尻 (周辺離島)

70年ほど前まで、早魃が続いたとき、アマガイ(雨乞い)という儀礼が行われた。ヤマダガワという田んぼへと続く川に村人たちが集まって、豚をつぶして食べた。牛など、豚以外の他の動物をつぶすことはなかった[聞]。

動物の供え方については、不明確な点が多い。肉の状態や料理法は未確認であるが、いずれも屠殺、解体後に供えたことから、本体そのものを供えるといった動物供犠を想定させる行為ではなかったと考えられる。

(3) 供犠的要素

ここで、動物供犠と思われるような行為や観念がみられないかという点を分析する。具体的には、動物本体の供進や部位の投棄といった行為や、動物を村人の身代わりとして使うといった認識などが推測される。ここでの分析は、琉球諸島の雨乞いが動物供犠か否か、そして、後項の「3. 動物及び供犠的要素がみられない理由」での考察で重要となる。

まず、原田信男は、文献史料の調査によって、かつて、日本本土の雨乞いには動物が不可欠で、その頭を井戸や池に投げ込むといった行為がみられたことを明らかにしている[原田 2012:184-186]。原田の挙げた40例の雨乞いの中には、頭部などの動物の主要部の放棄のほか、動物本体の供進、動物の中でも特定の色のものを選定し使用するという行為などがみられる。朝鮮半島でも同じように、動物が使われ、様々な供犠的行為がみられたという[原田 2012:35-42]。

対して、琉球諸島の雨乞いであるが、分

表 1. 『琉球国高究帳』にみる田畑の石高の割合

間切名	村落名	田	(%)	畑	(%)
北谷間切	桑江	184	54	159	46
	砂辺	142	50	142	50
	北谷	304	39	466	61
	あきな	180	38	300	63
	屋良	65	17	319	83
	平安山	38	13	251	87
	野国	-	-	679	-
	嘉手納	-	-	246	-
伊平屋島	田名	169	82	37	18
	我喜屋	127	75	42	25
	島尻	81	59	56	41
	野甫	307	6	5057	94
伊是名島	諸見	146	84	27	16
	伊是名	167	84	32	16
	仲田	169	84	32	16
	勢理客	145	84	28	16
	富着	114	84	21	16
	古読谷山	63	80	16	20
読谷山間切	与久田	38	75	13	25
	前田	72	71	29	29
	喜名	118	34	229	66
	長浜	17	31	38	69
	湾	48	28	125	72
	伊良皆	50	23	169	77
	上地	17	13	117	87
	城	21	8	234	92
	高志保	22	5	429	95
	渡慶次・宇座	27	4	695	96
	波平	13	3	362	97
	古堅	-	-	684	-
	渡口	-	-	228	-
	楚辺	-	-	755	-
	瀬名波	-	-	184	-
	具志川・中城間切 (久米島)	平良	43	98	1
たうの		192	93	14	7
兼城		247	90	27	10
比嘉		79	88	11	12
山城		163	86	27	14
宇根		90	86	15	14
かてる		216	83	44	17
しやなたう		40	82	9	18
ひやしやう・中城		55	81	13	19
まちや		467	80	114	20
かて川		58	79	15	21
島尻		49	79	13	21
儀間		139	79	37	21
ししとふ		11	79	3	21
上・具志川		136	79	36	21
宮平		9	75	3	25
阿嘉		40	74	14	26
とまり		87	71	36	29
西銘		528	70	228	30
仲地	170	54	142	46	
大田	8	50	8	50	
玉那覇	7	37	12	63	

※田と畑が石高の合計を占める割合を%で示した。
 ※間切ごとに田の割合が高い順に並べ、雨乞い儀礼の確認できた村落を網掛けにした。
 ※筆者作成

析の結果、そのような供犠的行為は1例も確認できなかった。

ただ、動物を使う事例の中には、供犠の要素との関連性を伺わせる興味深い事例がある。沖縄本島中部西海岸に位置する北谷町平安山の事例である。

平安山ではかつて、村内のウーチヌカーという湧泉で雨乞いが行われたという。当所で豚一頭をつぶし、その骨片や肉を供え、ノロという女性神役を中心に祈願が行われた。祈願後、ノロが雨乞いのウミを唱えながら、ウーチヌカーの水を村人にかけ、ウーチヌカーの神に降雨を願ったという [北谷町教育委員会編 1995:54]。

この事例において、骨片の使用が目される。供物である骨片と肉の状態は不明で、肉は祈願後、回収され料理されたかもしれないが、骨は骨片とあることから放棄されたと考えられる。供犠の要素とは直結できないものの、日本本土にみられる動物の主要部の放棄が簡素化した形とも推測できるのではないだろうか*⁵。

また、原田信男が明らかにしたように、日本本土における供犠の要素がみられる雨乞いでは、動物の部位は池や沼の神に対して投棄される。琉球諸島でも、動物を使う事例のうち2例は、湧泉（平安山）や池（山城）などの水神に肉が供えられる。水神に動物を差し出すことが降雨につながるといふ観念があったと捉えられる。その屠殺場として、池（山城）や水田へと続く川辺（鳥尻）が選ばれたことも、動物を差し出す対象が水神であったことの傍証ではないだろうか。

降雨を願い、水神に動物を差し出す点は、琉球諸島と日本本土の雨乞いにおける注目すべき共通点である。しかし、その差し出し方が、琉球諸島では供える、日本本土では放棄である点は、動物供犠であるか否かを考える上で重要である。肉を供えることは琉球諸島では村落や家レベルの儀礼においては一般的で、決して動物供犠に直結する行為ではないと思われる。

ここでの分析で、琉球諸島の雨乞いには動物を要する事例は少なく、明らかな供犠の要素も皆無であることが分かった。供犠の要素が確認できていない以上、現時点では琉球諸島の雨乞いを動物供犠とは把握できないと考えられる。

2. 雨乞いと水田稲作との関連性

稲作に基盤をおく社会において、その生育期の降水の多寡は、死活問題であったという。そのような社会では、雨乞いは重要性の高い儀礼であった [福田編 1999: 上巻 40-41]。ここで、近世から近代の琉球諸島の田畑の石高の分析と事例分析から、雨乞いと水田稲作との関連性を考察する。

(1) 田畑の割合

まず、17世紀中頃の沖縄諸島における田畑の石高を間切及び村落ごとに集計した『琉球国高究帳』を分析する。先島諸島は含まれていないものの、近世期の田畑の状況を知り得る貴重な史料である。

沖縄諸島の9例の雨乞いのうち、6例の村落名を史料中に確認できた。沖縄本島北部1（富着）、中部1（平安山）、周辺離島4例（田名、鳥尻、諸見、山城）である。

同島あるいは同間切内ごとに、田畑の石高と、その割合を整理したのが表1である。雨乞いの確認できた村落を網掛けにした。同島や同間切内での、田畑の割合の高低について分析した結果、雨乞いをおこなっていた村落のうち、同島・同間切内で田の割合がもっとも高い村落が2例ある（田

名、富着)。また、最高ではないが、山城村落は久米島の 22 村落中 5 番目に田の石高が高い。

伊是名島の諸見村落の田の石高の割合は 84% と高いが、島内のほか 3 村落と同じ割合であった。島内で田の割合が特段に高いとは言えないが、田の割合が高い村落に雨乞いがみられると把握できよう。

6 例中 3 例（田名、富着、山城）が同地域内で田の割合がとくに高いことが分かった。これは、雨乞い儀礼と水田稲作との関連性の高さを示唆すると言えるのではないか。しかし、反証もあり、平安山は北谷間切内で田の割合が最も低い村落となっている*⁶。島尻村落も島内の 4 村落のうち、田の割合は上から 3 番目で、特段に田の割合の高い村落とはなっていない。

次に、『琉球国高究帳』（17 世紀半ば）〔沖縄県沖縄史料編集所編 1981a:123-158〕、『沖縄県統計書』（1890・明治 23 年）〔沖縄県警察部 1911:23-26〕、『沖縄県統計集成』（1903・明治 36 年）〔琉球政府編 1967:62-89〕という田畑の石高が集計された 3 つの文献を分析し、琉球諸島各地における田畑の割合を整理し、その特徴を把握する。

3 つの資料における田畑の石高の合計を割合（%）にし、地域別に整理したのが表 2 である。各資料で田の割合が最も高い地域とその割合を網掛けにした。

『琉球国高究帳』の石高は沖縄諸島のみで、先島諸島は記されていない。沖縄諸島の各地の割合は、本島北部 73%、中部 45%、南部 53%、周辺離島 78% で、周辺離島が最も高く、本島内での割合は北部が高く、中南部が低い。

『沖縄県統計書』（1890 年）での田の割合は、北部 34%、中部 22%、南部 30%、周辺離島 21%、宮古 2%、八重山 35% であった。八重山が最も高く、同じ先島諸島でも、琉球諸島で最も低い宮古とは対照的である。沖縄諸島の各地域を高い順に並べると、本島北部、南部、中部、周辺離島となる。『琉球国高究帳』と比べると、沖縄本島では北部が高い点は同じであるが、周辺離島が最も低い地域となっている点は異なる。

前資料から 13 年後の『沖縄県統計集成』（1903 年）では、北部 19%、中部 10%、南部 9%、周辺離島 36%、宮古 3%、八重山 36% となっている。もっとも高いのは周辺離島と八重山で、ともに 36% となっている。前資料に比すと、宮古と八重山の割合はほぼ同じであるが、沖縄本島の 3 地域はともに低くなっている。北部と中部は約 2 分の 1、とくに南部は 3 分の 1 に減少している。周

表 2. 田畑の石高の割合（地域別）

	田			畑		
	17 世紀 半ば	1890	1903	17 世紀 半ば	1890	1903
沖縄本島北部	73	34	19	27	66	81
沖縄本島中部	45	22	10	55	78	90
沖縄本島南部	53	30	9	47	70	91
周辺離島	78	21	36	22	79	64
宮古諸島	—	2	3	—	98	97
八重山諸島	—	35	36	—	65	64
合計	62	23	14	38	77	86

※田の割合が最も高い地域とその割合に網掛けをした。
※筆者作成

辺離島だけは増加し(21%から36%)、八重山に並び、琉球諸島でもっとも田の石高が高い地域となっている。

資料分析の結果、琉球諸島の中で八重山諸島が水田の最も卓越する地域であったこと、また、『沖縄県統計書』では低くなっている点には疑問が残るが、『琉球国高究帳』、『沖縄県統計集成』で、田の割合が最も高くなっていることから、沖縄諸島の周辺離島も水田の多い地域であったことがうかがえる。

この結果を雨乞いの分布形態と比較すると、雨乞い事例の多くみられる地域(周辺離島及び八重山諸島)と、近世から近代にかけて田の石高の割合が高い地域が合致していることから、琉球諸島における雨乞いは、水田の卓越する地域に多くみられることが明らかになった。これは、雨乞いと水田稲作の関連性の高さと推察される。

ただし、田の割合が琉球諸島の中でも特段に低い宮古諸島が、雨乞いが2番目に多くみられる地域であることには注意しなければならない。宮古の事例は、雨乞いの分布形態の背景にあるのは必ずしも水田稲作だけではなく、別の要因も存在していることを意味している。

(2) 事例にみる水田稲作との関連性

儀礼の中に水田稲作との関連性がみられる事例がある。伊平屋島の田名村落の雨乞いでは、祈願には稲穂が使われたという。その際、山羊肉料理の共食が行われたが、村人たちは、各自炊いた米を弁当にして持ちより、肉料理と一緒に食べたという[聞]。神役による米の共食も行われた[琉球大学民俗研究クラブ 1961:37]。このように、供物や祈願道具、人々の食する食べ物に水田稲作との関連性がみられる。

同島の島尻では、村人たちがヤマダガワという水田へと続く川の側に集まり、豚をつぶし食べたという[聞]。八重山諸島の西表島の網取では、田んぼにつながるアミヤカーラという大きな川で、多くの人々が水遊びをし、川水を濁らせたという。すると、必ず雨が降ったといわれる[安溪 2007:145]。

両例において、儀礼の重要な場所として水田へと続く川が設定されたのは、儀礼によって成就される水の確保が単なる飲料用ではなく、水田への供給であったことを示している。

伊是名村諸見と久米島町山城では、戦前まで、主要な作物は米など、水田から収穫されるものであったため、現在より旱魃が農業に与える被害は甚大で、雨乞いの重要性は高かったという[聞]。旱魃によって第一に懸念されるのが水田への被害で、雨乞いはそれを回避するための儀礼であったとされる。

以上、数は5例と限られているが、儀礼に要される道具及び食べ物(田名)、儀礼が行われる場所(島尻、網取)、雨乞いに対する価値観(諸見、山城)など、雨乞いと稲作あるいは水田との関連性がみられる事例が確認できた。

さらに、これらの事例が、周辺離島(4例)と八重山諸島(1例)だけであることは、両地域が雨乞いの集中している地域であること(「1 - (1) 雨乞いの分布形態」)、石高の割合が高い地域であること(「2 - (1) 田畑の割合」)を鑑みると、雨乞いが水田稲作との関連性の強い儀礼であることがより明らかになる。

しかし、琉球諸島を俯瞰的にみれば、石灰岩地帯が多く、河川が少ないという地形的な条件か

ら、全国に比べ水田面積が少なく、社会における農業の基盤は畑作にあり、稲作ではなかった〔原田 2012:118〕。琉球諸島における雨乞いは稲作との関連性が強いことが分かったが、そういった事例が少なく、かつ水田の卓越した限られた地域にしかみられないのは、琉球諸島全体としては、当該が稲作に基盤を置く社会ではなかったことも意味しているからであろう。

3. 動物及び供犠的要素がみられない理由

これまでの分析結果を踏まえて、琉球諸島の雨乞いに、日本本土や朝鮮半島のような供犠的要素がみられない理由を考えたい。

まず、高谷重夫は、日本全国の雨乞いの調査から、牛や馬などの頭部を投棄するといった事例が日本各地にみられることを確認している〔高谷 1982:400-410〕。

動物の部位の投棄は、動物の骨や内蔵、糞尿などの不浄物によって聖地を汚し、神の怒りを招くことが降雨につながるという解釈から来るものであるという〔高谷 1982:416-417〕。つまり、その背景には、肉や血に対するケガレ観が深く関係している。動物の頭部や骨が、ケガレを象徴するものであることは、糞尿を投棄する事例〔高谷 1982:437-441〕のほか、動物の部位の代品として、葬具や産屋の不浄物を放棄する事例（1例。青森県）があることから分かる〔原田 2012:184〕。

人々にとっての穢れたものは竜神にとっても同様で、怒りを買うものであった。怒りによって竜神の活動が活発化し、それが雨を招くと考えられていた。

ただし、高谷は、本来、動物の部位の投棄は動物供犠としての行為であったが、日本人のケガレ観と抵触することによって、怒りを買うための汚物の投棄という解釈に変化したのではないかとしている〔高谷 1982:416-417〕。重要な指摘であるが、ここでは降雨につながる神の怒りを買うために、ある品物を投棄したという部分に注目したい。

既述の通り、琉球諸島では神を怒らせるため、動物の頭部や主要部を放棄する行為はみられない。では、それに相当するような、神を怒らせるために物を投棄する行為はないだろうか。文献資料の調査から、川に植物で作った毒を流す事例があることが分かった（2例）。いずれも八重山諸島、石垣島の事例である（石垣市白保〔先島朝日新聞 1938（7月3日）：3〕、伊原間〔山里 2015:75〕）。

高谷の報告の中に、川や聖地に毒を流す行為はみられない〔高谷 1982〕。2例と少なく、琉球諸島に普遍的にみられたとは概括できないものの、毒の使用が沖縄における雨乞いの特徴と捉えられよう。

毒は人命を奪いかねない代物、人にとって喜ばしくないものという点で、日本本土の汚物で川を汚すと同様の行為と言え、それにより水神が怒り、降雨につながるという認識が読み取れる。ただ、水神の怒りを買うものが、動物とは無関係である点が注目される。

この問題を考える上で、検討すべき史料がある。『球陽』の尚灝 21 年（道光 4・1824 年）の条（巻 20-1633）に、首里王府レベルで実施した雨乞いの概要が記されている。祈願の場所や方法、実施者の詳細が記されているが、注目したいのは、文末の「禱雨の際は都鄙、屠宰を禁止す」という記述である〔球陽研究会編 1974:489〕。首里や那覇などの都市部のみならず、周辺の諸間切、村落にいたるまで、雨乞いの祈願中は家畜の屠殺を禁ずる、というものである。

王府からの雨乞い中の屠殺の禁止は、1832 年〔球陽研究会編 1974:502-503〕には同文がみられ、

1856年(「年中各月日記(帳当座、咸豊6)」[琉球王国評定所文書編集委員会編1996:298])には、「首里・那覇・泊・久米村・諸間切雨乞中殺生禁断之事」とある。

また、年号は40年ほど下るが、笹森儀助が、西表島での調査中に確認した1889年(明治22年)7月の八重山役所長からの雨乞いに関する文書を、「雨乞ノ通知状」として紹介している。その中に、「奉公人モ加へ、又衣服ノ制及殺生禁止ト家作及修繕方共雨乞中可差止(さしとむべき)」という記述がみられる[笹森1982:237-238]。ここでも雨乞いにおける殺生禁止の記録がある。ただ、『球陽』(1824,1832)や「年中各月日記」(1856)では、家畜の殺生だけが禁じられているのに対し、「雨乞ノ通知状」(1889)では、衣服や家屋の作製や修繕も禁じられている。

雨乞いにおける屠殺を禁ずる王府(政府)の指示から、2つの可能性が推測できる。ひとつは、かつて琉球諸島の雨乞いには動物が要されていたが、王府による屠殺禁止によって消失した可能性(可能性①)、2つ目は、雨乞いにおける動物の使用、あるいは水神に動物を与えることは、降雨とは逆効果、つまり、日照りが続くことにつながるため、厳重に禁止したという可能性である(可能性②)。

王府による屠殺の禁止に関する文献資料から、両方の可能性を検証したい。

まず、畜殺の禁止に関する史料であるが、1666～73年の間に王府からの通達を集成した『羽地仕置』に、「葬礼の時、牛共殺大酒仕候儀、前々より禁止したりといえども、頃日、猥にこれあり、弥稠敷、申付らるべく候」とある[沖縄県教育委員会編1981b:16]。1697年、『法式』という沖縄本島の各間切に通達された文書には、「婚礼の時、肴は豚以下であるべきこと、牛は耕作の助けになる為、屠殺して祝儀に用いることは今後禁止する」とある[沖縄県教育委員会編1981c:61]。また、1768年(乾隆33)12月、首里王府から宮古の在番・頭らに通達された『与世山親方宮古島規模帳』の中に、「地船が漲水に停泊する際、『泊くさらし』と称して上国する人々が牛を殺し、神酒や酒を準備して出費しているという。良くないことなので、今後は禁止すべきこと」という記事がみられる[宮古島市教育委員会文化振興課編2010:72]。

これらの通達から、王府から各間切に、冠婚葬祭や儀礼などにおける牛の屠殺が禁じられていたこと、にも関わらず民間では屠牛が継続されていたこと、そして、牛が王府にとって重要な動物であったことなどがわかる。

牛の屠殺禁止が度々出されても、なかなか無くならなかったことを鑑みると、可能性①の雨乞い儀礼に限って、王府の禁止が功を奏し、動物の要素が消失したとは考えにくいであろう。

次に、3つの史料における王府の禁止は、雨乞いに対するようなすべての家畜を対象としたものではなく、牛の屠殺だけである点に注意しなければならない。『法式』の「肴は豚以下であるべきこと」という記述からも、牛の屠殺だけが禁じられていたことが読み取れる。

以下の18世紀初頭から半ばまでの2点の史料から、王府が養豚の奨励政策を実施していたことが分かる。

『球陽』10巻の1713年(尚敬王元年)の項に、「仁政を覃敷し、人民に蒞治して、各郡邑をして鶏豚を飼養せしむ」とある[球陽研究会編1974:249-250]。各地域の村々に対して、鶏や豚の飼育を奨励している。三司官と呼ばれる首里王府の宰相であった蔡温が、1750年、王国の政治経済についてまとめた『独物語』という文書の中に、王府による養豚の奨励が行われていたことが分かる記述がある[蔡温1960]。

養豚を奨励したということは、「肴は豚以下であるべきこと」という『法式』の記述からも分かるように、諸儀礼における豚の使用は許可されていたと考えられる。首里王府は、家畜全体の屠殺を禁じたのではなく、農耕に役立つという理由から、牛だけを屠殺禁止の対象としたのである。

対して、雨乞いにおける屠殺を禁じた王府からの直接的な3つの通達（『球陽』（1824,1832）、「年中各月日記」（1856））では、動物の種類は指定されておらず、すべての動物を対象とした一切の屠殺が禁じられている。

これは動物の肉や骨を使用すると、降雨とは逆の効果、日照りの継続につながると認識されていたためと考えられる。そのことを示唆する沖縄本島中部の東海岸に位置する嘉手納町屋良村落の事例を挙げたい。

屋良では、毎年の旧暦4月前半の吉日、ムルチウグワンと呼ばれる年中行事がある。ムルチという池に座する竜神に対し、3個の鶏の生卵が投入される。詳しい年代は不明であるが、かつては鶏が使われたとされ、それ以前は豚や山羊などの動物が使われたという。動物が卵のように投入されたか、供えた後に、村人らによって食されたのかは未確認である。しかし、卵という動物の代品を投棄する行為、そして、目的を達成するための生け贄であるという村人の認識から、ムルチウグワンは動物供犠ととらえられよう。

注目すべきは村人たちの見解で、本儀礼は雨乞いであるという見解〔屋良誌編纂委員会 1992:511〕と、日乞いという見解がある〔嘉手納町史編纂委員会 1990:641-643〕。もし、雨乞いであれば、日本本土や朝鮮半島に類似する動物供犠を伴う雨乞い儀礼になるが、なぜ、1つの儀礼に対し、全く逆の2つの見解がみられるのだろうか。

儀礼を雨乞いと考えた場合、その由来譚に不可解な点がみられる。確認できた由来譚はいずれも、「ムルチテイルイチニ、ダイジャテイルムンヌ、ナナチチ、カジフカチャイ、アミフラチャイ（ムルチという池に大蛇が住んでいて、7カ月も風を起こしたり、7カ月も雨を降らせたり）」というふうな、ムルチの大蛇が風雨によって村人たちを苦しめていたというところから始まる〔原国 1956:19〕〔嘉手納町史編纂委員会 1990: 641-643〕。雨乞いであることを示唆するような、日照りが続いたという由来譚は未確認である。由来譚にみられる目的は、荒れ狂う竜神を静めること、風雨の中断、つまり日乞いであって、雨乞いではない*7。

18世紀半ば（1743～45年）、首里王府によって編集された『遺老説伝』という説話集に、次の文章がある。

「北谷郡屋良邑の東、山林尤も深遠、岩石甚だ巍峩たり。内に一溪潭有り、清澄底に徹し、深淵万仞なり。名を無漏溪（一名宝溪と曰ふ）と曰ふ。昔、一大蛇有り。時々翻波湧瀾、放声响亮、或は出来上岸して牛と相闘ひ、或は半ば波裏に蔵れ、半ば雲間に現はる。人其の長さを知らず。今世に至り、風雨將に起らんとするの時に値ふ毎に、潭波湧出し、怒声大いに起り、転じて東海と、共合响響すれば、必ずや数日を聞せずして、風雨忽ち起るとしか云ふ」〔嘉手納 1978:115-116〕

ムルチウグワンの由来譚にみられたように、屋良村東方の無漏溪（ムルチか）という池の大蛇（竜神）の活動が風雨を招くとある。

伝承によると、竜神の活動を抑制し、雨を止めるために、若い女性が捧げられていたとされる。

それが後に動物に変わったという部分は由来譚にはみられないが、豚などの動物を捧げていたことから、動物は女性の代品で、それは竜神を満足させるためのご馳走であり、それを食べた竜神はおとなしくなり、風雨が止むのであった。

池に捧げられる動物は、竜神の暴挙を抑えるためのもので、それによって得られる報酬は雨ではなく、晴天（太陽）であった。ムルチウグワンは動物供犠を伴う日乞い儀礼であったと考えられる。

なぜ、ムルチウグワンには雨乞いと日乞いという正反対の目的が意識されるようになったのかという疑問が残る。ムルチウグワンには次の行為がみられる。

「雨乞いをする必要がない年でも、祈願日になると村の行事として有志や古老の方々などが拝みに行く。その時、火の神屋、城間屋、屋良大川城、産川、樋川、後川、前川、ヌール川などもいっしょに拝み清掃した」[屋良誌編纂委員会 1992:511]。

儀礼に際し、聖地の清掃が行われる。その中には、産川、樋川、後川、前川、ヌール川など、多くの湧泉がみられる。現在も、清掃はムルチウグワンの数週間前を目処に行われる[聞]。単なる清掃ではなく、ムルチウグワンに関連した行為であることが分かる。

日本本土の雨乞いには広く、池や沼、滝の水をかき回す行為がみられた[高谷 1982:551]。本来は祈願に際して、聖地の清掃という作法であったと考えられ、それが後に神を怒らせるためという解釈が生まれたという[高谷 1982:335-336,560]。

儀礼は雨乞いでもあるという人々の認識、また、竜神の怒りを買うためと思われる湧泉の清掃から、屋良ではムルチという池沼の竜神に対し、日乞いのほか、雨乞いも行われていたと推測される。同じ場所で、同じ祭祀対象に対し、雨乞いと日乞いという2種類の儀礼が行われた。両儀礼の目的は正反対であるものの、雨という同じ自然現象を意識していたため、両儀礼の目的が混同され、1つの儀礼に正反対の2つの目的が意識されるようになったのではないだろうか。

以上を踏まえ、琉球諸島の雨乞いに供犠的要素がみられない理由を整理したい。

かつて、琉球諸島の村落では豚や山羊などの家畜が各家庭で飼われていることが一般的で、年中行事や人生儀礼など、家や村落レベル、様々な場面で動物が畜殺され、供えられ、食されてきた。肉はケガレの対象ではなく、ハレの日の貴重な御馳走であり、日本本土とは動物や肉に対する考え方が大きく異なっていた。琉球諸島において、動物の部位は神を怒らせるものではなく、満足させるものであった。

日乞い、つまり、長雨や暴風を招く竜神の暴威を鎮めるには、竜神が喜ぶご馳走である動物を捧げる必要がある。屋良のムルチウグワンにみられるように、琉球諸島における竜神に動物を与えることは、その活動を抑え、日を乞うためであった。逆に、雨を乞うためには、竜神を暴れさせなければならないが、そこにご馳走の動物を捧げると、竜神は満足し、活動せず、旱魃は長引いてしまうと考えられていたのであろう。このような、肉に対する考え方の違いが供犠の形態に表現され、琉球諸島の雨乞いには日本本土のような供犠的要素がみられないのだと考えられる。

総括と課題

琉球諸島の雨乞いに日本本土のような動物の使用や供犠的要素がみられない意味を、文献史料及び聞き取り調査で確認できた事例の分析を通して考察してきた。最後に、要点と課題を整理したい。

- ① 雨乞いは、琉球諸島の中では八重山諸島が最多で、沖縄諸島では本島より周辺離島に顕著にみられる。両地域は単に数だけが多いのではなく、村落の総数との比較から、集中度も高いことが分かった。
- ② 近世から近代の水田と畑の石高の割合、雨乞い儀礼の分布形態、儀礼内容の分析から、雨乞いは水田稲作との関連性の強い儀礼であることが分かった。ただ、それを示唆する事例数は少ない上に、特定の地域だけにみられることから、全体的にみれば、琉球諸島は稲作に基盤を置く社会ではなく、雨乞いの重要性も低かったと考えられる。
- ③ 雨乞いに動物の使用例は全体の2割弱（29例中5例）と少なく、供犠的行為は皆無であった。動物供犠との関連性を示唆するような事例がみられるものの、明らかな供犠的要素が確認できていない以上、琉球諸島の雨乞い儀礼は現時点で動物供犠とは把握できない。
- ④ 日本本土ではケガレの象徴として動物の部位を池や沼に投棄し、怒った竜神の活動が降雨につながるとされるが、琉球諸島では、その反対の日乞い儀礼において、竜神を満足させ、その活動を抑え、雨を止めるために動物（肉）が使われたことが分かった。琉球諸島の雨乞いに日本本土のような供犠的要素がみられないのは、肉に対する考え方の違いが供犠の形態に表現された結果と考えられる。（以下、略図）。

■雨乞い： 竜神の活動停滞 → 太陽（旱魃） → 竜神の怒りを買ひ、その活動を活発化させる行為（毒の流入【琉球諸島】・動物の投棄【日本本土】） → 雨

■日乞い： 竜神の活動の活発化 → 風雨（長雨） → 竜神の喜ぶものを与え、その活動を抑制させる行為（動物の供進【琉球諸島】） → 太陽

琉球諸島における事例収集（分布形態の明確化）、雨乞い儀礼の原形と変化、日乞い儀礼についての調査分析、日本本土及び諸外国の事例との比較などが今後の課題である。

* 1 事例群は、文献によって確認できたものと、聞き取り調査によって確認できたものに分けられる。前者を文献、後者を聞き取りと表記した。

* 2 文献資料調査は、2013～15年にかけて、琉球諸島の雨乞いに関する論考、各市町村史及び民俗誌を対象に行った。聞き取り調査で確認できた雨乞いは、主に2003～15年、筆者が琉球諸島全域を対象に行ったシマクサラシと呼ばれる年中行事の実態把握を主眼とした実地調査の中で確認できたデータである。

* 3 首里王府レベルで行われた雨乞いは、沖縄本島南部の事例としてカウントした〔山里2010〕。

* 4 雨乞い儀礼は、周縁部にみられる傾向があると捉えられるのではないだろうか。早計であるが、琉球諸島全域に広く存在した雨乞いが、次第に途絶え、周縁部に残存した結果とも推測できる。ただ、今後の調査によって、各

地の分布数が大きく変化する可能性にも留意しておきたい。

- * 5 久米島町山城では、雨乞いに山城池という池所にあった大きな岩の上で豚を解体したという。「豚の血が岩に染まり、村人達が肉汁を食べている間に大雨になったということもあったらしい」という記述がある。雨乞いに血を使ったという日本本土の4例の事例を鑑みると、岩を血で染めるという供犠的行為を想起させる〔原田2012:186〕。しかし、解体時に血で染まった岩を描写しただけという可能性もあり、供犠的要素とは直結できないであろう。
- * 6 時代は大きく異なるが、大正末の平安山の様子を知る話者によると、村落内に水田耕作を行う家は旧家の2.3軒しかなかったという（2008年聞き取り調査）。
- * 7 八重山諸島の石垣市川平に、竜と早魃との関係を考える上で、興味深い次のような伝承がみられる。大昔、川平村落で大早魃が起こった。そのとき、ある草むらでいびきが聞こえたので、近寄ってみると一匹のハブが寝ていた。神のお告げと捉え、その場所を掘ると水が湧き出てきた。当所は現在も湧泉として利用されているという〔崎原1971:224-225〕。この伝承はハブ（竜）の活動休止が早魃につながり、その活動の再開が水（雨）の入手につながることを示唆しているのではないだろうか。

聞き取り調査

伊平屋村田名（沖縄諸島の周辺離島）：2008年。I（80代男性）、60代女性、A（70代男性）、K（80代女性）、I（80代女性）、N（80代女性）、K（80代男性）

伊平屋村島尻（沖縄諸島の周辺離島）：2008年。K（90代女性）、K（80代女性）、M（80代女性）、M（80代男性）、I（80代男性）。

伊是名村諸見（沖縄諸島の周辺離島）：2006.8年。80代女性、70代女性、80代男性、80代女性、80代女性、80代女性、N（60代男性）

久米島町山城（沖縄諸島の周辺離島）：2006年。T（80代男性）、T（80代女性）、T（80代女性）、K（80代女性）、60代男性

嘉手納町屋良（沖縄本島中部）：2006年。T（50代男性）、50代男性、I（60代男性）、T（80代男性）。

参考文献

- 沖縄大百科事典刊行事務局編（1983）『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
安溪遊地（2007）『西表島の農耕文化-海上の道の発見-』法政大学出版局
池間栄三（1957）『与那国の歴史』琉球新報社
沖縄県教育委員会編（1981a）「琉球国高究帳」『沖縄県史料』前近代一
沖縄県教育委員会編（1981b）「羽地仕置」『沖縄県史料』前近代一
沖縄県教育委員会編（1981c）「法式」『沖縄県史料』前近代一
沖縄県土地調査事務局編（1976）『沖縄県市町村別大字・小字名集』
嘉手納宗徳編訳（1978）『遺老説伝』角川書店
嘉手納町史編纂委員会（1990）『嘉手納町史』資料編2 民俗資料
球陽研究会編（1974）『球陽』（読み下し編）角川書店
蔡温（著）（1960）『独物語』琉球史料研究会 比嘉寿助
先島朝日新聞（1938）『先島朝日新聞』（7月3日付）

- 崎原恒新 (1971) 「八重山の雨乞い信仰」『まつり』17号 (特集・沖縄のまつり Ⅲ) 国際アートコンパニオン まつり同好会
- 笹森儀助 (校注者: 東喜望) (1982) 『南嶋探験 1』平凡社
- 高谷重夫 (1982) 『雨乞い習俗の研究』法政大学出版会
- 北谷町教育委員会 (1995) 『北谷町の拝所』北谷町文化財調査報告書第15集
- 原国政朝 (1956) 『通俗琉球史』原国政武
- 原田信男 (2012) 『なぜ生命は捧げられるかー日本の動物供犠ー』お茶の水書房
- 福田アジオ [他] 編 (1999) 『日本民俗大辞典』上巻 吉川弘文館
- 宮古島市教育委員会文化振興課編 (2010) 『与世山親方宮古島規模帳』
- 山里純一 (2010) 「琉球王府の雨乞い儀礼」琉球大学国際沖縄研究所『国際琉球沖縄論集』1(2)
- 山里純一 (2015a) 「八重山古謡にみる雨乞い思想 (特集 水)」琉球大学法文学部『地理歴史人類学論集』(6)
- 山里純一 (2015b) 「沖縄における地方の雨乞い (佐喜眞望教授退職記念号)」琉球大学法文学部『琉球大学法文学部人間科学科紀要』(32)
- 屋良誌編纂委員会 (1992) 『嘉手納町 屋良誌』
- 琉球王国評定所文書編集委員会編 (1996) 「年中各月日記 (帳当座、咸豊6)」『琉球王国評定所文書』第12巻 浦添市教育委員会発行
- 琉球大学民俗研究クラブ (1961) 『沖縄民俗』第4号

調査にあたり多くの方々に御教示を賜りました。心から敬意と感謝を表したいと思います。誠にありがとうございます。

本論は、2016年9月24日に、沖縄文化協会(東京支部)2016年度公開研究発表会(於:法政大学)において、「雨乞い儀礼と動物の関連性について」という題目で口頭発表した内容を加筆修正したものである。

本論は、「平成28年度公益信託宇流麻学術研究助成基金」の助成による研究成果の一部である。